

## 大学の学修空間における 知識創造活動のための空間的諸条件の検討

野口 貴秀

自ら物事を考え、それを外に発信していく力（＝創造性）が今後の社会を担う若者に求められている。大学では学生のこれらの力を伸ばすためにアクティブラーニングの実践とそれを可能にする空間、ラーニングコモンズの設置を進めている。SECIモデルを理念とする知識創造行動を誘発するオフィス空間の事例が報告されており、大学においても知識創造行を意識した空間設計が学生の創造性を高めるのではないかと考えた。

この仮説を検証するために、本研究では、知識創造行動を意識した学修空間が持つべき条件を明らかにすることを目的とした。目的に対する研究方法は現地でのアンケート調査と行動観察調査の2種類を採用し、調査対象は幾つかのプロセスを踏んで大阪大学附属図書館総合図書館、新潟大学附属図書館中央図書館、お茶の水女子大学附属図書館の3館とした。分析は項目間のつながりのグラフ化することで知識創造活動と空間との関連性を明らかにし、行為ごとの図面へのプロットからラーニングコモンズに対する空間利用の特徴を整理していった。

アンケート調査では3大学ごとに得られた結果から学修内容を知識創造行動に当てはめて、空間タイプとの関連性分析を行った。結果として、平成26年現在、従来の図書館空間にも見られた情報収集や情報の活用といった知識創造行動と図書館内の閲覧スペースやラーニングコモンズ内のPCなどの情報機器を扱うことができる空間と関連性が高いことが示された。また、ラーニングコモンズが設置されたことにより、従来の図書館ではあまりみられなかった話し合いながらの学修が活発に見られ、フレキシブルのある空間との関連性が示された。ラーニングコモンズが設置されたことにより、創造性に関わる多様な学修行為が見られるようになったと言える。

行動観察調査では、観察した行為内容ごとにラーニングコモンズの図面にプロットし、行為と空間タイプや一緒に行う人数の関連性の分析と空間利用に関する考察を行っていった。結果として3大学ともにPCを使用できる空間でのPCの利用や会話が許される可動式什器のある空間において教え合いや話し合いの学修が関係深いことが示された。また、パーティションで周囲からの視線を感じないようにしたり、空間内でも入り口から遠くの方が利用したりすることが多いことから、視線を感じない空間が求められているといえる。

以上、まとめると、大学の学修施設における知識創造行動としては情報収集や情報の活用、話し合いなどの対話・相談にそれぞれ関連性の高い学修空間があり、そのような空間が持つべき要素としては、自由に変形できる可動式の什器があることや周囲からの視線を感じない空間形成にあることである。

(指導教員 三森弘)